

新幕からの脱出

山口県 石本 亮 二

一 出生から終戦まで

私は昭和五(一九三〇)年十一月、朝鮮の首都、京城(ソウル)の竜山鉄道官舎で石本家の次男として生まれ、家族は祖母を入れて五人であった。この地区は京城駅から南へ四キロメートル行ったところであるが、途中に竜山駅がある。この官舎の南側堤防道路に立てば、漢江の大河が眺望できた。

大正二(一九一三)年春、大手建設会社の倒産に伴って倒産し家屋敷を処分、文久二(一八六二)年生まれの祖父に連れられ家族八人が、広島県小方村から朝鮮に渡り、京城で再起を図ったのである。その後、明治三十四(一九〇一)年生まれの父が、総督府鉄道局の技術員として就職、昭和三年結婚、倒産から立ち直って、二代目として家督

を継ぎ、そして私たち兄弟が生まれた。

昭和九年春、父は京城から約二百三十キロメートル南の全羅北道の裡里機関区へ転勤となり、郡庁舎近くの閑静な民家に転居した。この裡里西方約二十三キロメートルに黄海を望む群山の町があり、この白村江口は昔、六百六十三年に日本軍が合戦したところである。

昭和十二年、小学校に入学、学校から帰れば、兵隊ごっこをし、冬には近くの凍った水田でスケートの練習をした。

昭和十四年、父は京城の竜山に転勤となった。この間に生まれた弟が二人、合わせて家族六人が竜山の鉄道官舎に移り、兄と私は竜山小学校に転校した。真冬の漢江は河が凍り、休日にはスケートを楽しむ人たちにぎわい、朝鮮少年達は手製のそりで遊んでいた。

昭和十五年、京城東大門区の清涼里にある京城機関区に転勤になり、春には弟が一年に入学、二人で市電に乗り東大門国民学校に通学した。夏

休みには、近くの京城農業学校のため池で銀ヤマ捕獲に夢中になった。

昭和十七年、父は京城の北約百九十キロメートルの黄海道新幕に転勤になった。この田舎町は、後に設定された北緯三十八度線の北側であったため、住民が悲惨な運命をたどることになるうとは、当時思いもよらなかったことである。黄海道はリングの産地で、秋には箱単位で購入した。冬期は零下五度くらいになるので、官舎の一室はオンドル部屋になっていて、和室ではペーチカ型ストーブで暖をとった。

やがて米は配給制になり、文化系の大学、高専生が学業半ばに出陣し、徴兵年齢が十九歳に引き下げられるなど、戦時色が濃くなってきた。担任の教師が海軍に召集され「先生は水兵になる。諸君はパイロットになって戦ってくれ」と言い残し、軍艦の乗組員として出撃、後に戦死された。国民学校卒業後、京城・平壤の都会進出組は親元を離れて学生寮に入り、地方進学組は新幕から

約五十五キロメートル北西の沙里院へ汽車通学することにになり、三つの中学校に別れていった。

私の入学した平壤師範学校は、高専三年課程の、以前は高等科と言われた本科と一年課程の講習科もある併設校で、本科卒業生は高等科の教員に、中学五年課程の尋常科卒業生は小学尋常科の教員になるのである。

学校の所在地は牡丹台の東側、大同江の左岸にあり、陸軍飛行第六連隊の飛行場が隣接していたので、飛行機のエンジン音がしばしば授業の邪魔をした。学生寮は第四寮まであり、各寮長は本科三年生であるが、既に教員と軍人の経験がある人たちが、私たちから見れば完全な「おじさん」であった。学校でも寮でも、すべて軍隊式で気合いを入れた。軍事教練のときには高専課程の者は入隊すれば士官に、中学課程は下士官になるのであるから、「号令調整」という大声で明瞭な号令を掛ける発声訓練をさせられた。

学徒動員では、尋常科生は飛行場の荒れ地を開

墾して軍隊用の野菜栽培をすることになり、農地まで予科練の歌「七つボタンは櫻に錨」を歌いながら行進して農作業。本科、講習科生は滑走路延伸のため、朝鮮人労務者と一緒になってトロッコで土を運ぶ作業。みんな配給の米が少ないので、顔を見合わせるたびに「腹が減ったなあ」がきまり文句になっていた。

昭和十九年後半から、本科生は海軍予備学生、陸軍甲種特別幹部候補生を、尋常科生は海軍予科練習生を志願して、何人かは学校を去って行くようになった。

昭和二十年になり、アメリカ軍が沖繩に上陸、地上戦の最後を迎えたころ、作業中に「特攻機の出撃あり、見送りせよ」との伝達があり、整備兵の列に師範学校生が並んで帽子を振り激励することになった。見送りの列に並んで見ると、滑走路の滑走開始地点に待機しているのは、「隼」や「飛燕」など新鋭機ではなく旧型戦闘機であった。並んでいた本科生からは「かわいそうに！」と同情

う無駄と分かっている高射砲の射撃は繰り返さなかった。この日、八月九日は長崎に原爆が投下された日だと思うが、ソ連国境に近い町羅津と平壤東方約百五十キロメートルの港町元山が、ソ連軍機により爆撃された。この日から朝鮮東北部は混乱の中、終戦を迎えたのであるが、このことを知ったのは何日か後であった。

八月十五日正午に重大発表があるとのことで、日本人学生の何人かは通常の作業から校内作業にまわされ、ラジオの前に整列したが、雑音がひどくて玉音は聞き取れず、「日本はどうも負けたらしい」と聞かされた。朝鮮人級友の話の通りになったのである。「神風」を信じて疑わない日本人こそ、「愚かな奴よ」と、彼らはさぞ大笑いしたことであろう。大本営発表だけが唯一の情報源であり、我が方に不利な情報が得られるような時代ではなかった。私は平壤師範学校で終戦を迎えた。十四歳であった。

その日の夜は、陸軍の飛行機がやたらとエンジン

の音が漏れた。彼らパイロットたちは、国難に殉じようと「一機一艦体当たり」の悲壮な覚悟で搭乗していたのであるが、アメリカ軍の新鋭機「グラマン」「ロッキード」に、尋常に立ち向かえないだろうと危惧されたのである。

そして「本土決戦」が盛んに叫ばれるようになったある日、登校時に出会った朝鮮人の級友が「日本は降伏するらしいぞ！」と言うので、「ひよつとしたら」とも思ったが「いいや、日本は神国、神風が吹くさ」と一笑に付した。「今に分かるさ」と彼は私から離れていった。

ある日、アメリカ軍の超空の要塞B-29が一機、遙か一万メートル上空を悠々と飛来したとき、遅れて警戒警報が鳴り、高射砲を撃つたが届かず、戦闘機が迎撃発進したが追いつけず、B-29は悠々と西方へ去った。八月六日は、広島に新型爆弾（原爆）が投下された。その後、もう一度平壤上空をB-29が通過したが、前回、高射砲弾の破片が落下して民家の屋根を破損した経験から、も

んの音を響かせ飛んでいたが、そのうち平壤神社が火災になったのを見て自爆したのかと思つたが、朝鮮人に放火されたものと分かった。彼らにとつて、神社は植民地支配の象徴と見なされ、放火したのである。その夜は人民軍と名乗る若者たちが、師範学校の教員宿舎に押しかけ、脅しをかけたそうである。

二 終戦直後から収容所生活まで

八月十六日の朝礼で「日本は戦争に負けた。学校は休学、日本人は内地に引き揚げることになった」との説明があり、終戦が確認された。

日本人の警察官は、身の危険を察していち早く姿を消したようである。思想犯として刑務所に収容されていた朝鮮人が開放され、人民委員会が設立され、武器を奪って保安隊や赤衛隊が結成された。反日感情はきわめて強く、「日帝三十六年間の圧政に仕返しをしてやる！」と日本人に当たるようになったのである。

八月十七日、新幕機関区の朝鮮人職員が、平壤

に私を迎えに来たので、一緒に家族の住む新幕に戻った。平壤駅前は日本兵が警備していたが、開放感で浮かれ出た朝鮮人の群衆や、物売りの人でごった返し、駅構内も多数の乗客で大混雑していた。平壤を出発してからは、鉄道沿線の民家や踏切で、少年たちが「マンセイ！ 朝鮮勝った」と叫び、太極旗を振っていた。その都度情けないやら、敗戦国民としてこれからどうなっていくのかと、不安に駆られた。

新幕駅で朝鮮人職員と別れ、家に帰って驚いたのは、部屋いっぱいには食器など陶器類、さらに鏡台や家具も広げられ、朝鮮人の婦人が何人も出入りして物色していたことである。売りに出すのだという。私は父に「のんびりしていいいで、早く京城か釜山に行った方がよいのでないか」と言ったところ、「陶磁器類は親しいリンゴ園の経営者に頼まれた。南下するにしても、満州からの列車が釜山まで数珠繋ぎになっていて、新幕駅にも一列車が止められている。また広島は新型爆弾が落

車運行を禁止した。これで、避難民が列車で京城まで南下することは不可能になった。この日以前に、京城方面に列車で南下したのは、機関区の高責任者の区長など二、三家族だけであった。家財一切を放棄し、南下を決意した人たちは、三十八度線脱出の苦難を免れたのである。

新幕国民学校がソ連軍の兵舎になり、日本軍にはいなかった女兵士がいると聞いて、一目見てみたい好奇心から親の心配をよそに友人と二人で見物に行った。正面にはマンドリン型自動小銃を持った若い兵士が立っていた。女兵士は、服装から見て経理か医務の士官のようで、年齢は三十五歳前後だったろうか。ソ連で大きいのは「機関車と女性のお尻」と聞いていたが、まさしくその通りであった。

八月二十四日、ソ連軍司令官が威興に到着し、ソ連軍による北緯三十八度線完全封鎖のため、在留邦人はもちろんであるが、朝鮮人の往来も自由にできなくなった。ソ連軍が進駐する前に、鉄道、

とされ壊滅的な状況となり、大竹付近まで被害が及んでいるようで、今すぐ内地に帰るといいうわけにはいかない」ということであった。終戦以来、ラジオ放送も新聞もなく情報が不足であったから、勘を頼りに行動するしかなかったのだが、このときの判断の悪さから、三十八度線突破、脱出という苦しみを体験することになったのである。

八月十九日、友人からの連絡で、また百三十キロメートル北の平壤へ在学証明書を受取りに行つたが、その日先遣隊であろうかソ連軍が進駐して来るといので、歓迎の朝鮮市民が沿道を埋めていた。学校からの帰途、大同江橋付近に師範学校四年生以上の朝鮮人学生が、教練用の小銃や木銃を持って並んでおり、軍刀をぶら下げ馬に乗った朝鮮人教官も一緒だった。教官は地下活動をしてきた人民委員と繋がった共産党員であったのか？ 日本が降伏すると教えてくれた級友は、この教官から情報をもたらしたのであろうか。

八月二十日、この日からソ連軍は一般の旅客列

船、徒歩で三十八度線を越えて帰国できた者は、北朝鮮在留邦人の約十七パーセントだけで、少しでも金がほしいと目先の金銭欲にとられ家財道具を売りに出したものの、人民委員が不買指示を出したので、売れたものは少なく、売れたものも二束三文にしかならなかったのである。

平壤には、陸軍第三十師団と飛行連隊があったが、その一部の兵隊たちがソ連軍の捕虜になる前に部隊を脱出し、八月十七日だったか、内地に向かつて南下を始めた。当初十数人が帯剣し集団で南下していたが、武器を持つている方が危険だと判断して、剣を捨て丸腰になった。やがて人数も二、三人連れになり、服も民間人のもになった。そのころ我が家にも二人の兵士が軍服を作業服と交換に来て、ついでに飯盒で米を炊きたいというので、母が釜で飯を炊き食事をさせ、むすび弁当を渡し互いに激励の言葉を交わした後、二人は南に向かつて出発していった。

事態は刻々と悪化し、八月三十日、日本人はリ

ユックサクと手荷物、布団だけを持って強制収容された。一般民間人は駅前旅館や、鉄道独身寮に押し込められた。窮屈な集団生活の始まりであった。

当初一階の部屋にいた四十人ほどの独身者は、そのうち二階に移されたが、二階の部屋は全部で二十四室、一室は六畳程の広さしかないのに、そこに四家族十五人が押し込められ、一人か二人は押入で生活しなければならなかった。独身者は狭くて暑苦しい部屋に入らず、廊下で寝起きするようになった。

収容所に集められた数日後、ソ連兵と赤衛隊員に「軍隊にいた者は全員前の道路に集合せよ」と命令され、正直者は全員出ていった。そのままソ連軍のトラックに乗せられ、連れ去られた。残された家族は手を振りながら泣き崩れた。連れ去られた元兵士はみんなシベリア送りとなり、酷寒の地で強制労働をさせられ、飢えと寒さで多くの人が死んでいったのである。

近住民の肝を冷やしておき、「シスター、マダム、ダワイ（女を出せ!）」とやってきた。男たちが百人ほどいたが、小銃を持った兵隊に抵抗はできなかった。年頃の娘から四十歳ぐらいまでの女性は、すべて黒髪を切り落として坊主頭になった。ときどき、腰に軍刀を吊り従卒を連れて馬でやってくる赤衛隊の隊長に、兵隊の乱暴について抗議したが「日本人も中国人に対して同じようなことをした。しかし、ソ連軍にはよく伝えておく」と言っていたが、兵隊の乱暴はすぐには収まらなかった。この隊長は共産党員で、戦争中思想犯として刑務所に入れられていたという。

九月五日、保安隊員が父を連行していった。嫌疑は、機関区で槍の穂先を造ったことであった。アメリカ軍が上陸してきたときの決戦用の武器として、穂先を約百本造ったのであるが、「朝鮮人を殺すためのものだろう」と疑われ逮捕、留置されたのである。

九月八日、赤衛隊がきて「日本人は帰国させる。

九月はじめから、十五歳以上の男性は町内で強制労働をさせられることになり、毎朝収容所前に整列させられたが、人員点検をするソ連兵は人数確認に毎日三十分以上もかかった。四列の縦隊は五列に並べ替えたりしていたが、かけ算ができないのが原因で「兵隊は五十まで、下士官でも百ぐらいまでしか計算できなかった」とうわさになった。このような兵隊ではあるが、六十連発の自動小銃や大型戦車など優れた武器を装備しているから、勝敗は目に見えていた。

さて、収容所の食事は一日二回、一回に握り飯一個、作業に出た者には二個とたくあん漬け一、二切れが支給された。新幕駅で立ち往生した列車で生活していた日本人たちも、ソ連兵を恐れて徒歩で南下を始めたが、老人や幼児を抱え途方に暮れていた家族は、この収容所に移ってきた。

ソ連兵は、日本人から時計や万年筆を強奪し、女と見れば日本人、朝鮮人の区別なしにレイプした。夜になると兵隊が自動小銃をぶっ放して、付

列車を用意してある、全員集合」と言う。約四百人の日本人避難民が、あわててリュックサクと手荷物だけを持って収容所前に並んだ。そのとき、朝鮮人の鉄道員が四人ほどやってきて「俺たち朝鮮人を馬鹿にし、殴った奴に仕返しする」と列の中に入り込み、見つけた三人の顔、頭を殴り、体を蹴ったりしていた。家族共々許してくれと頼んだが、彼らの仕返しは執拗であった。殺されても何も言えない敗戦国民であり、赤衛隊員もすぐには止めに入らなかった。暴行を受けた人は、騒動が収まった後手当を受けて、頭に包帯を巻いていた。

日本に向かって出発するというのに、父を新幕に残していくことになるのかと不安でいららしていたが、突然「釈放された」と帰ってきて、家族は喚声を上げた。駅で列車に乗り込んだ日本人は「これで日本に帰れる」と、車内は喜びの声で満ちあふれていた。しかし発車した列車は北上し始めたので、喜びの声は「いっぱい食わされたの

では？」と不安の声が変わって、騒然となった。やがて約五十五キロメートル北の沙里院に着いた。「三十八度線に近い海州港で乗船、南朝鮮の港に渡るだろう」など、樂觀的な話をしている人たちもいた。

列車を降ろされ悲観論、樂觀論が飛び交う中、市中を引き回された挙げ句、沙里院駅構内のコンクリート床に一晩寝かされ、翌朝同じ列車で新幕の収容所に戻された。人民委員会が日本人を連れ回したのは、急いで列車に乗せ、収容所の残った品物のうち、値打ちのあるものを取り上げるためであった。

その夜、父は収容所自治委員会から呼び出された。帰ってきたとき、顔に殴られた傷跡があった。制裁を受けた理由は「父が造った槍の穂先を防空壕に隠したために、収容所が苦勞して掘り出さなければならなくなった」ことにあったらしい。作業はきつくても同じ日本人同士ではないか、憎み合うことはないのと思つたが、今の委員会は戦

飯は楽しかった。メニューは赤衛隊員と同じで白米のご飯、おかずは日本陸軍の缶詰という豪華版で、収容所では摂れない栄養が補えた。

赤衛隊員が、駅前収容所から炊事に来ていた中年女性に「俺と結婚しないか！ 戦災の日本に帰つても良いことはないぞ。新幕に永住しないか」と盛んに口説いていたが、彼女はどうか決断したのだろうか？

日本人収容所ができたころは、朝鮮オモ二四、五人が朝鮮式お好み焼き「チジミ」を売っていたのだが、日本人の財布が軽くなって売り上げが減少し始めるとともに、店を出さなくなった。

三 脱出、三十八度線突破

帰すとだまされてからはソ連を当てにしても駄目だとあきらめ、収容所を脱出して、開城まで約六十五キロメートルを徒歩で南下することを本気で考えるようになった。廊下を寢床にして夜空の星を眺めながら、「その鈴ささえ寂しく響く」と、「国境の町」を歌っていた青年もいつの間にか姿

後新しく選出された人たちで、日本に帰れるとだまされたり、朝鮮人の部下に殴られたりした恨みつらみを父に向けたものらしい。逆境に置かれたときに、不条理なことが行われた現実を肝に銘じた事件であった。

同じころ、赤衛隊の雑役に出ていた一ヶ月前の知人が同室の家族たちと脱出したので、その仕事私が私に回ってきた。仕事は隊長たちの入浴する五右衛門風呂を沸かすのであるが、入浴の水は国民学校まで汲みに行くのである。風呂が満杯になるまで何回も往復しなければならず、つらい仕事であった。水汲みが終わると薪を割って焚きつけ、風呂が沸いたのを確認して収容所に帰るのは夕方であった。

この赤衛隊屯所に、十歳くらいの朝鮮人の少年が小使いをしていた。暇なときにはこの少年とも話をしたが、「日本は朝鮮に負けたのだ。お前らは朝鮮語を使え」と威張っていた。仕事はつらく、少年にまで威張られたが、この少年と二人での昼

を見せなくなっていた。娘の身を案じる親たちは、頼りがいのある独身男性に娘を託し三十八度線を突破するよう依頼したり、家族全員で脱出したりで、九月中ごろには若い女性の姿は見られなくなった。収容所脱出の際には、まず所内日本人の目を逃れるため、深夜にこっそりと出ていかなければならなかった。

私たちと同室の大人たちも、密かに徒歩で南下することを検討し始めた。朝鮮人やソ連兵の目を逃れて山路を歩き、当然山中で野宿するのであるから、雪が降り気温が零下五度から十度まで下がる冬期を迎える前に脱出を完了しなければならぬ。最初に脱出したのはA家族で、二十歳から十五歳までの妊婦一人を交えた四人。次に脱出したのは、おのおの幼児二人を含む四人家族のB・C家、それに我が家の三家族であった。我が家は、父、母、私、十、七、一歳の弟の六人である。三家族合計十四人で脱出したのであるが、親は幼児を胸に抱き、リュックサックを背負うので大変だ

った。

九月二十日、十四人が二班に分かれて暗闇に紛れて出発し、あらかじめ決めた集合地点で落ち合うことになった。先発は、軍隊と登山経験のあるB主人をリーダーとするB家族四人と、母が背負った一歳の弟と七歳の四男の三人、計七人である。後発はC家族四人と父、私、十歳の三男の三人、計七人となった。

二十一時ごろ、二階の部屋の窓から各自のリュックサックを密かに降ろし、一階の裏口から出てリュックサックを回収、朝鮮人に見付からないように注意しながら集合地点に向かった。集合地点に着いたが先発七人の姿はなく、先を探したり、引き返してみたりしたが時間が経つばかりなので、仕方なく私たちだけで南方に向かって歩き出した。民家のあるところは、手前から道路を避けて山に入り、夜空の星を見ながら歩いたが、道路を歩くのと違って疲れがひどく、いつの間にか尾根づたいに歩いていた。夜が明けて山頂から周囲を眺

た。

駐屯所には小隊長らしい若い士官がいた。私たちを連行した兵士を、士官が「奪った物は返してやれ」と叱っているようだった。兵士は銃を士官に向けた。下士官が中に割って入って騒ぎは収まったが、私たちの持ち物は何も返してもらえなかった。上官に銃を向けた行為は重罪だが、兵士は軍紀など何とも思っていないようだったから、悪名高い囚人兵だったかもしれない。いずれにしても、日本人の命が虫けら同様に扱われていたときだったから、命を落としかねない出来事であった。

やつとので放免されたので、思い切って公道を南下しようとしたが、南下は駄目だという。仕方なく元の収容所に引き返すことになった。その間、母の一行のこと、C家族のこと、そして私たち出戻りを自治会委員は温かく迎えてくれるだろうか、など考えながら収容所へ帰着したのは、十六時ころであった。昨夜二十一時ころ脱出して約十時間、随分南下したつもりが公道を歩けば五

めると、ただ山頂を中心に少し下をぐるぐる回っていたようで、星を頼りにした夜間行軍は素人には無理なようだった。南へ進んだ距離は思ったほどではなかった。

とにかく朝食を摂ってから一寝入りすることに、枯れ枝を集めて飯盒で米を炊き始めたとき、麓から朝鮮人三、四人が登って来るのが分かった。追い剥ぎか、日本人狩りか？ 火を消してあわてて反対方向へ降りて行ったが、幼児二人を連れていたC家族は逃げ遅れて捕まったようであった。

私たちも下山したところを日本人狩りの一群に見付かった。朝鮮少年たちの先頭に、ソ連兵が一人「ヤボンスキー・ストロイ・ストリャーユ」(止まれ、撃つぞ)とわめきながら自動小銃をぶつ放し始めた。耳元を「ピューン、ピューン」と赤い尾を引いて銃弾が体をかすめて飛んでいった。本気で撃ちだしたのだ。「今度は撃ち殺すぞ！」という勢いにのまれてホールドアップ。父は自慢の懐中時計と金銭を強奪され、ソ連駐屯所へ連行され

時間くらい、距離にしたら八キロメートルくらい南下しただけであった。翌日からは、何事もなかったように父はソ連兵の、私は赤衛隊の作業に出て毎日を送ることになった。収容所の部屋には暖房設備もなく、北朝鮮の冬が迫ってくるのにおのいていた。

しばらくして、九州出身の人から脱出の仲間に入らないかと父に誘いがあった。参加するために科された条件は、グループの幼児を背負うことであつた。このグループには案内人が付いているので、寝ること、食べること、追い剥ぎに遭う心配もないということであつた。父は同行することを了解した。

十二月五日脱出決行となった。夜収容所を抜け出したが、日本人同士の監視はなかった。案内人が付いているのに意を強くし、四家族十六人が二列になって歩いた。第一夜は積雪の山路をただ黙々と歩いた。途中の部落では立ち止まって注意深く様子を探り、犬に吠えられたりしたときには

息を殺して足早に迂回した。夜明けころには案内人の家の暖かいオンドル部屋に上がり、用意された布団に入るや否や、強行軍で疲れ切った私たちは起きるまでぐっすり寝込んだ。

二日目は、辺りが薄暗くなる前に夕食を済ませた。出発するとき弟の靴がないのに気付いた。家人は「犬がくわえていったんだろう」と言うだけで、探そうとする気配も見せなかった。その家の子供に合うと見て取り込んだと思っただ、それ以上追求もできず、家人が代わりに出した朝鮮草履を履いた。しかし靴とは違って解けた雪が草履にしみ、足の指が凍傷になった。その傷跡は今でも残っていて、見るたびに雪道のつらかったことを思い出す。

この夜は、弟は疲れを我慢し皆に遅れないように一生懸命歩いて歩き、父も、幼児を背負って頑張っていた。幼児の父親も、ときどき父と交代して歩いた。やがて夜が明け、前日同様民家で睡眠をとり、夕方、キムチや朝鮮みそ汁の食事で体も

くして雪の積もった田圃の中を進んだ。行く手にソ連兵とは明らかに違う服装のアメリカ兵を確認してからは、公道に上がり一団となって一気に三十八度線を突破、アメリカ軍駐留地に入った。開城であった。初めて見るアメリカ兵はスマートで粹なジャンパーの軍服で、勤務のない兵隊は、集まってくる若い韓国女性を相手に話をしたりふざけたりしていた。

無事に「死の三十八度線」を突破、これで本当に日本に帰国できるのだと、一同目に涙を浮かべて喜び合った。この日は奇しくも大東亜戦争開戦の日であった。

四 引揚げ、開城から大竹

開城の日本人世話会に行き、開城駅から貨物列車で京城へ行き、難民収容所となっている西本願寺へ連れて行かれた。仏教寺院は破壊、放火を免れたので私たち難民の収容所として利用されていたのである。父が日本人会の職員に名前を呼ばれ、母たちがここで待っていることを知らされた。同

温まり、寒い夜道を歩く元気が出てきた。

いよいよ三日目の夜出発というときになって、案内人が「報酬を追加してくれなければ、これから案内できない」と言い出した。仕方なく各家族ごとお金を出し合い、足りない分はリュックサックの衣類なども与えて、やっと納得してもらった。この夜も強行軍であったが、三十八度線近くと思われるところで、「案内はここまで。この先に見える電気の点いている所がソ連軍の監視所だから、そこを避けて三十八度線を突破すればよい」というのだが、明かりは点々とあつて、どれがソ連軍のか分からない。もしソ連軍に捕まれば今までの苦労が水の泡になってしまう。はつきり分かる所まで案内してほしいと、ここでも金を出して彼を納得させた。回りが少し明るくなり、やっと状況がつかめたので案内人には礼を言っただけで別れた。そこからは、グループのリーダーが先頭になって山を降りた。

ソ連軍の兵士に見付からないように、姿勢を低

行した九州グループとは別れて、家族七人が二カ月と二十日振りに一緒に寝起きできるようになった。母の話によると、B家族と母たちは九月二十九日には開城に着いたそうだから、六十五キロメートルを九日間で踏破したことになる。山で私たちはより先に捕まったC家族のグループとも十月二十日に京城で会ったそうだから、どういう苦労をしたのか分からないが、三十日目に出会っている。京城難民収容所のだっ広い板の間で一夜が明けたが、父は徴兵検査では甲種合格した体格であるが、幼児を背負った三日間の強行軍がこたえたようで、ずっと布団の中で眠り続けた。回りの難民家族が逐次引揚列車に乗るのを見て、私たちの心はいらだった。

京城に来て三日目、町の治安は良好なので、市内へ母と外出した。財閥が引き揚げた後の邸宅の庭では、朝鮮ボーイスカウトが大鍋で雑炊を炊き乾パンを乗せ、難民に振る舞っていた。難民収容所でも、北と同様一日二回の握り飯だったから、

早速ご馳走になった。次に母の友人宅に寄ったが、私の頭髮は五カ月間も伸び放題、服も汚れ難民そのものに見えたのであろう、私と同年代の娘さんが「ニヤツ」と笑って引っ込んだ。入浴もしておらず、シャツには虱シラミも湧いていた。

十二月二十三日、難民收容所を出て、京城駅から貨物列車で釜山に向かつて南下した。この列車の機関士が、金ほしさに山中や野原で停車した。その都度世話役がカンパした。いくら渡したのか分からないが、釜山までに三回あった。この貨車で寝ている間に、私が陸軍の兵士からもらった略帽を取られてしまった。以後、日本人にも泥棒がいると思つて警戒した。

十二月二十四日、釜山駅から港まで日本人世話会員の誘導でぞろぞろ歩いて、世話会建物のそばで休憩したが、そのとき、父と私の服装があまりにもみすぼらしかったので、ドンゴロス生地（ジヤンパー）を頂いた。冬の上着としては不向きであったが、このような製品のあることに驚いた。

がつていった。私も甲板に出たが、かすかに島影が見える程度であった。

十二月二十七日朝、博多港へ上陸、そこで引揚援護局の白い医務服を着た人が、「女性の方で妊娠のおそれのある方は申し出て下さい」と案内していた。朝鮮で乱暴された人の妊娠中絶と性病治療が目的とのことであった。

港から駅のホームへ行く途中には、地元婦人会の人たちがお茶の接待をしていたが、私たちはお茶を飲まず列車に急いだ。客車は満員状態で発車した。列車は各駅停車で、引揚専用車ではなく一般の客も乗り込み、座席の間にも割り込み、中には子供を網棚に乗せようとする人もいた。

十二月二十八日朝、大竹駅に着いたとき通路の向かい側席にいた父と弟に、大声で「降りるぞ!」と叫びながら乗客をかき分け押しつけて、やっとの思いでホームに降りたが、列車は父たちが降りないうちに発車してしまつた。下りの列車で引き返してくるだろうと、彰を背負つた母と二人で父

釜山港にはアメリカ兵以外に、日本兵が引揚者の警備、整理をしていた。やがて乗船の列に並び始めると、ダンスをしていたアメリカ兵二人が、私たち難民の襟首からポンプでDDTを噴霧する役目に専念し始めた。一人当たり現金の持ち込み許可額は千円までで、それ以上は没収されると言つていた。千円という額は、一人数カ月分の食費に相当した。金を持つていない難民を見つけては、「博多に着いたら返せ」と千円持たせていたのは京城あたりの富豪だったのか。

十二月二十五日、博釜引揚船「徳寿丸」に乗つた。すし詰めでトイレに行くのも大変だった。船が汽笛を響かせたとき、これで敗戦以来脅かされ続けた朝鮮を離れ、日本に帰れる嬉しさと、生まれ育つた朝鮮を離れる寂しさが同時にこみ上げてきた。海峡にはまだ機雷が浮遊しているので、帰港地は博多とは限らないとの話が伝わってきた。翌朝まだ薄暗いうちから甲板の方で「日本が見えるぞ!」との声に階段付近の人たちがぞろぞろ上

の実家に行った。

父たちは翌日実家に着いたが、父は疲れが完全に回復してはいなかった。大竹は原爆の被害は受けなかったが、広島へ勤めに出ていた人たちが、広島市内で家を焼かれた被災者たちが大竹に移住していた。私たち家族は父の本家と母の実家に分散して世話を受けることになった。兄は、旧海軍軍人で編成された引揚輸送船の乗組員になつたので、顔を合わせることはなかった。

五 生活再建

昭和二十一年を迎え、親戚の助力もあつて町営住宅を補修して入居、家族七人一緒に生活できるようになった。この住宅地には広島や呉の戦災者が住んでいたが、私たちや台湾からの引揚者も入居し、空き家はなくなつた。父は朝鮮での経験を生かし、国鉄に就職しようとしたが雇用条件が折り合わなかつたのであきらめ、駅前の引揚者マーケットで八百屋を出店することになり、父が仕入れを、母が販売を担当することになった。当時は、

小豆の代わりにさつま芋をアンに使う広島の商品店がよく買いに来ていた。公定価格とヤミ価格があつて、物価がうなぎ登りに上がるインフレ経済の中での生活は苦しかった。私は、家の零からの出発を手伝うために学校へ行くことはあきらめかけていたが、父の勧めもあり、四月に中学校に編入された。学校には兵学校や予科練から復学した先輩が幅をきかせていたが、彼らの卒業とともに軍国主義の影も消えていった。

家が再建の緒に就いたばかりなのに、母が肺結核を患い入院した。新募収容所の狭い部屋で、同室のA氏の結核が母と幼児だった彰に感染したもので、栄養不足と疲労が重なって発病した。復員引揚船に乗組んでいた兄が休暇で帰省していたので、母の代わりに働き急場をしのいだ。彰は二歳になる前に脳を冒され、二十一年六月に死亡した。物価統制令が撤廃されて、零細店は途端に売り上げが落ち込み、父の恩給に頼る生活になった。その後父は行商を始め、兄は復員局を退職して近

くの工場へ勤めることになった。母は昭和二十五年退院し、呉服の行商を始めた。私が目指した教員への道は学業半ばに遭遇した敗戦、引揚げで夢と消えた。戦後の就職難で、しばらく臨時作業員として働き、念願だった国家公務員技術職に採用されたのは二十一歳のときであつた。昭和二十八年、良質な町営住宅に入居できた。新しい家に入つて家族からは暗さが消え、明るいムードに変わつていった。

昭和三十三年三月、十二歳と四十四歳との二度、破産の辛苦をなめた父は、患つた胃がんのために死亡した。五十五歳であつた。兄は大手繊維会社員、三男の弟は外国航路の無線通信士、四男の弟は高校を卒業した。

昭和三十七年二月、母は駅前百貨店の一角を借りて呉服店を開いたが、病弱な母はその後も入院を繰り返して、昭和五十三年五月、脳内出血で七十歳になる前に他界した。このとき私たち兄弟は、三地域でそれぞれ家庭を持っていた。